

〈Report〉 Exploration of “Children's Culture”
Class Contents and Teaching Methods: A Survey
on Early Childhood Play Experiences, Knowledge
and Reading of Children's Literature in Students
at Nursery Teacher Training Schools

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 美和 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1533

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「児童文化」の授業内容と教授法の探究

— 保育者養成校の学生を対象とした幼児期の遊び経験と 児童文学の知識や読書に関する調査から —

佐々木 美 和

1. 研究の目的

2021（令和3）年度より、保育者養成課程の「児童文化」（1年次後期）を担当することになり、学習内容の主軸となる「遊び」や「児童文化財」について履修する学生が子ども時代にどのような体験をしてきたのか、どの程度児童文化財、特に絵本や昔話を中心とする児童文学領域の素養があるのか、授業を開始する前に調査し理解する必要性が生じた。周知の通り、“文化”は地域や時代によって常に変容するものである。このくらい学生は知っている、できるとする教員の先入観や思い込みは、保育者を目指す者の学びにとっては弊害でしかない。また、養成校の「児童文化」授業では、単に保育教材を作ったり演じたりする演習に止まらず、遊びの理論や文化財の歴史的背景、教材の特徴などの知識を伝えることが肝要と考える。幼稚園や保育所等で遊んだ体験が、子どもの育ちにとってどのような意味があるのかを学び考える有意義な授業を展開するためにも、教員による教授法探究は不可欠である。

本論文の目的は、本学の「児童文化」科目において「遊び（遊戯活動）」や「児童文化財」を教材として用いる授業の内容と指導展開や方法を探究することである。そのために、子ども時代の学生の遊び体験の実情と児童文学の知見、読書習慣の程度を把握するアンケート調査の実施と分析を行った。その結果への考察と共に、幼児教育や保育の現場における「児童文学」教材、特に絵本や紙芝居などの実習活動時の扱いに関する実態の把握も行った。

2. 研究の方法と本論の構成

研究方法として、次の3つのアンケート調査を行った。

〔調査A〕「児童文化」授業で学ぶ「遊び」（伝承遊びを含む）について、学生の子どもの経

験と、主要な児童文化財である絵本や昔話の「読み聞かせ」体験や教材の知識についてアンケート調査を実施。

〔調査B〕教育実習Ⅰ（幼稚園）の実習活動として、手遊び・絵本の読み聞かせ・紙芝居実演を中心に実習園でどの程度「児童文化財」を教材として活用したのかアンケート調査を実施。

〔調査C〕短期大学入学後の約1か月間の読書量と、幼少期の家庭と施設（幼稚園や保育所など）での読み聞かせを受けた頻度、小学校から高等学校までの「読書運動」の有無についてアンケート調査を実施。

アンケート結果を考察し、学生にとって有益な「児童文化」授業の在り方と、教材である「児童文化財」の効果的な活用を含め授業内容と教授法について検討し、2022（令和4）年度の授業内容（シラバス）の改善点を探る。

3. 学生の遊び経験の実際

(1) 調査Aの概要と結果

調査Aのアンケートは、「音楽」の科目担当教員である宮澤多英子講師と共同で実施した。令和3年度の第2回「児童文化」の授業時（2021年9月28日～10月4日、調査対象は科目履修学生163名）にMicrosoft office 365 Forms システムを用いて回答を求めた。調査実施にあたり、先述の研究目的を本学学科長（細淵富夫教授）に説明し了承を得た後、履修学生にも倫理的配慮を口頭とFormsの質問サイトの冒頭部文章とで2度説明した上で行った。回答者総数は157名（女子150名、男子7名）である。

質問項目のうち本論では、表1に示した9項目を分析対象とする。1と2では学生の子ども期の遊び経験を、3と4では「児童文化」授業で学ぶ「伝承遊び（折り紙）」の経験と実際の技量について調べた。続く5～9は、幼児保育現場で最も使用されている児童文化財である「絵本」について、その「読み聞かせ」を受けた経験と、「絵本」および児童文学に関する基礎知識について尋ねたものである。

幼少期および児童期の遊び体験（A-1, A-2）の結果が図1である。遊び項目は幼少期（小学校就学前）の回答数（黒色）を降順に配置し、そこに児童期（小学校就学期）の同項目の回答数（白色）を上段に重ねた。幼少期では「川遊び、崖登り」などが、児童期では「バスケットボールや野球」といった競技や「WIIU, 4DS」などのゲーム機器名を挙げる学生も少数ではあるが一定数いた。回答のあった遊びの項目数は、幼少期が54項目、児童期が61項目であった。

表1 「調査 A」 質問項目

1. 幼少期（小学校就学前）に、よく遊んだ「遊び」にはどのようなものがありますか。1～3つ程度答えてください。
2. 児童期（小学校就学期）に、よく遊んだ「遊び」にはどのようなものがありますか。1～3つ程度答えてください。
3. 折り紙を折ることができますか。
4. 授業時に作成した「鶴」を踏まえて、「鶴」を折ることについて答えてください。（独りで何も見ずに折ることができる／折る手順をある程度示してもらえれば、折ることができる／折る手順を一つひとつきちんと教えてもらえれば、時間内に折ることができる／折ることができない（指定時間内にできないを含む））
5. 幼少期（小学校就学前）に、「家族」から絵本を読み聞かせてもらっていましたか。（高い頻度で「読み聞かせ」をしてもらっていた／ときどき「読み聞かせ」をしてもらっていた／「読み聞かせ」はあまりなく、テレビなどの動画映像を見ていた／「読み聞かせ」はなく、テレビなどの動画映像を見ていた／その他【自由記述】）
6. 幼少期（小学校就学前）に、「保育所や幼稚園等」で絵本を読み聞かせてもらっていましたか。（高い頻度で「読み聞かせ」をしてもらっていた／ときどき「読み聞かせ」をしてもらっていた／「読み聞かせ」をしてもらった記憶がない／その他【自由記述】）
7. 次の昔話や童話のあらすじを知っていますか（タイトルだけは知らないものとします）。知っているものを全て選んでください。（桃太郎／金太郎／浦島太郎／力太郎／かぐや姫／鉢かつぎ／かちかち山／舌切り雀／おむすびころりん／ヘンゼルとグレーテル／赤ずきん／マッチ売りの少女／かえるの王子／人魚姫／雪の女王／銀河鉄道の夜／注文の多い料理店／手袋を買いに／ごんぎつね／蜘蛛の糸）
8. 「桃太郎」の家来となった動物をすべて答えてください。
9. 「注文の多い料理店」を書いた作家の名前を答えてください。

続いて同データの遊び項目に注目して更に「①遊ぶ際の人数」「②屋外か屋内か」「③家庭か施設か」の3点から分析した。①について、幼少期では一人遊びが32項目（59.2%）、集団遊びが17項目（31.5%）、不明（区別不可）が5項目（9.3%）となり、児童期では一人遊びが34項目（55.7%）、集団遊びが18項目（29.5%）、不明（区分不可）が9項目（14.8%）である。②について、幼少期では屋外遊びが30項目（55.5%）、屋内遊びが19項目（35.2%）、不明（区分不可）が5項目（9.3%）となり、児童期では屋外遊びが37項目（60.7%）、屋内遊びが18項目（29.5%）、不明（区分不可）が6項目（9.8%）となり、いずれも「屋外遊び」を挙げる学生が多いことが分かる。③については、施設（保育所、幼稚園、小学校）内と思われる遊び項目が、幼少期では27項目（50.0% 家庭で、および施設と家庭いずれでも可能な遊びも同項目数 50.0%）、児童期では27項目（44.3% 同上 34項目 55.7%）であるが、回答数で計上すると幼少期が332（76.5%）、児童期が288（69.6%）と割合が増加する。

折り紙（A-3）では、折れるとの回答が85（54.1%）、折れないとの回答が72（45.9%）で、実際に授業時間内の課題とした「鶴」制作の自己評価（A-4）は、「単独で折れる」91（58.0%）、「一

通り折る手順が分かれば折れる」36 (22.9%), 「一つひとつ折る手順を示されれば折れる」15 (9.6%), 「折れない (授業時間内未終了含む)」15 (9.6%) であった。

(2) 調査 B の概要と結果

調査 B のアンケートは、2021 年 11 月 18 日から 30 日で臨んだ教育実習 (幼稚園) での「児童文化」体験について振り返り、報告する内容である (課題回収期間は 2021 年 12 月 6 日～23 日、調査対象は実習終了学生 159 名)。回答者総数は 155 名 (女子 149 名, 男子 6 名)、設問は表 2 に示した 4 項目である。

結果、観察と部分実習を主とする教育実習 I (幼稚園) で、「手遊び」では 83.2% (129 名)、「絵本の読み聞かせ」では 92.3% (143 名)、「紙芝居の実演」では 33.5% (52 名) の学生が子どもたちを前にして体験したとの報告があった。

4. 学生の児童文学作品の理解

児童文化財「絵本」について、幼少期 (小学校就学前) の「読み聞かせ」体験 (A-5,

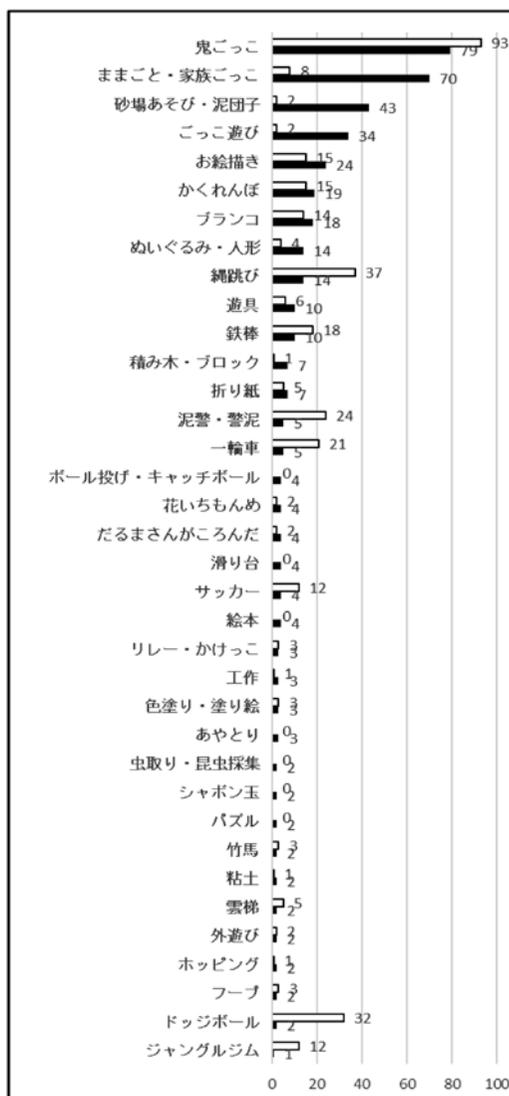


図 1 「調査 A」項目 1 と 2 の回答結果 (一部)

表 2 「調査 B」の質問項目

1. 実習生として「手遊び」は子どもを前にどのくらい行いましたか。(まったく実演しなかった/実演回数 5 回以内/実演回数 6 回以上)
2. 実習生として「絵本の読み聞かせ (読み合いを含む)」は子どもに対しどのくらい行いましたか。(まったく実演しなかった/実演回数 5 回以内/実演回数 6 回以上)
3. 実習生として「紙芝居」は子どもを前にどのくらい行いましたか。(まったく実演しなかった/実演回数 2 回以内/実演回数 3 回以上)
4. そのほか (手遊び, 絵本, 紙芝居以外) 子どもたちの前で実演したことを記入してください。

A-6) は, “家庭” では頻度に差はあるが「経験あり」が102 (65.0%), 「動画映像の視聴」が49 (31.2%), 「一人で読んだ」2 (1.3%), 「覚えていない」4 (2.5%) であった。一方“施設” では「覚えていない」9 (5.7%) を除く学生が絵本の読み聞かせを受けたと回答した。

児童文学 (昔話や童話) の基礎知識 (A-7) のうち, あらすじ理解の結果が図2である。回答数が最も多かった「桃太郎」だが, 家来の動物名を尋ねる問い (A-8) の正答率は81.5%であり, 誤答の

多くが“雉”を“鳥”と回答していた。49名が知っていると回答した「注文の多い料理店」の作者名の問い (A-9) の正答率は13.4% (21名) と低かった。

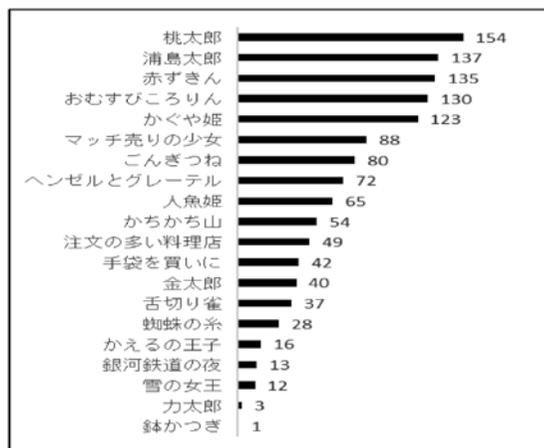


図2 [調査A] 項目7の回答結果 N = 1279

5. 学生の読書習慣の実際

前節の結果を受けて, 追加で学生の読書習慣に関するアンケート調査 (調査C) を実施した。令和4年度の授業後 (2022年5月18日と19日の2日間で1年生は「知の技術」, 2年生は「教育実習事前指導 (幼稚園)」, 調査対象は本学こども学科の在籍学生) に調査Aと同様にFormsを用いて回答を集めた。調査活動の倫理的配慮も調査Aと同じ手順を踏んだ。回答数は, 1年生93名と2年生151名の総数244名である。

質問項目のうち本論では, 「2022年4月6日から調査日までの期間の読書冊数」「幼児期における家庭と施設で読み聞かせを受けた経験の頻度」「小学校から高等学校までの就学中の学校やクラスでの“読書活動”の有無」について公表する。

まず「学生の読書量 (C-1)」だが, 4冊以上と答えた学生は13% (32名), 2, 3冊は15% (37名), 1冊が16% (38名), 1冊未満が6% (16名), そして“一冊も読んでいない”と回答した学生は121名で全体の50%を占めた。2年生より1年生の方が読書量の少ないことも確認された。

「幼児期における家庭と施設で読み聞かせを受けた経験の頻度」の結果は, 家庭でのものを図3に, 施設 (幼稚園や保育所等) でのものを図4として示した。

対象者の学年による差異は大きくなく, 幼少期の家庭および保育施設において, 前者は7割, 後者は8割強の学生が読み聞かせを受けてきたことを記憶していた。

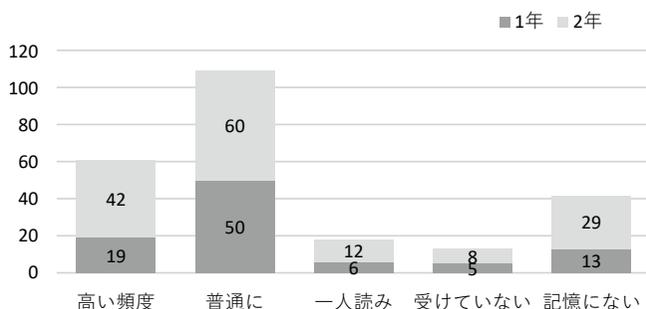


図3 家庭での読み聞かせ体験の頻度 (N=244)

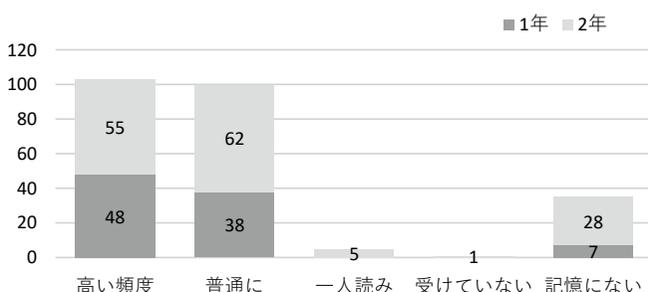


図4 施設での読み聞かせ体験の頻度 (N=244)

後継する学校期間での読書活動について調べるにあたり、1990年代から全国で盛んに励行されている「朝の10分間読書」を含む、学校やクラス単位での“読書活動”の有無を尋ねた。その結果が図5である。

ここから、義務教育期間である小学校と中学校で活動が盛んに行われている一方で、私立校や定時制、通信制といった多様な学び方が展開する高等学校に入ると、読書活動を行わない学校が実施校より上回っていることが把握される。本短大に在籍する学生の所属校での結果なので、これを全国の高校一般として読み取ることは出来ないが、それでも本学の学生の学修課程においては進級や進学に従い“読書”を促す取り組みが減少している事実は存在している。この影響は、図6で示した「就学期における1週間の読書量」の推移にはっきりと反映されている。読書の習慣を大半の学生が身に付けていない状況で高等教育の学修に取り組んでいるのである。

6. 分析と考察

[調査A]の回答結果から、学生の遊び体験の発達段階による移り変わりはロジェ・カイヨワ(1913-1978)の遊戯理論に合致している。著書『遊びと人間』(*Les jeux et les hommes*, 1958)に

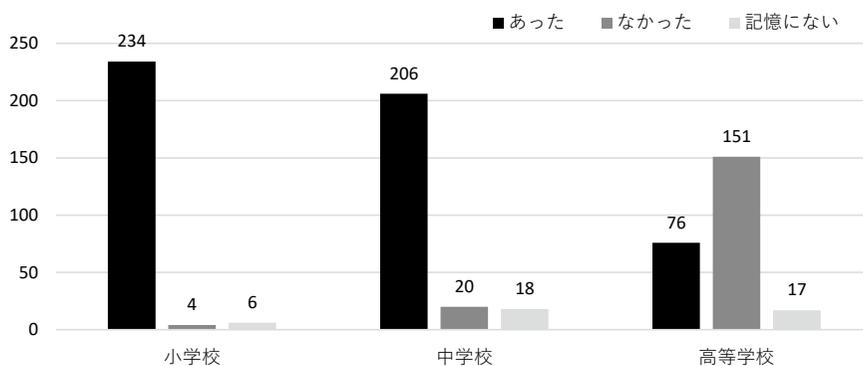


図5 就学期の読書運動の有無 (N=244)

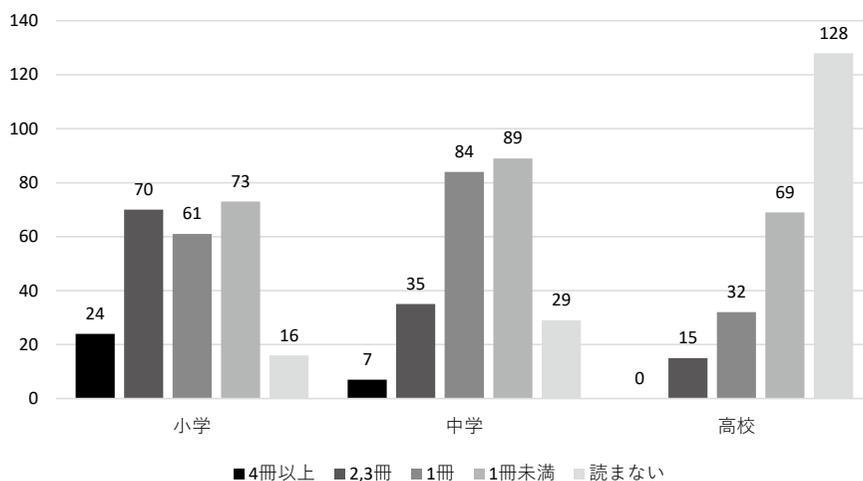


図6 就学期における1週間の読書量 (N=244)

よると、遊びにはパイディア（遊戯）とルドゥス（競技）という2つの極があり、前者は“子どもらしい”を意味するギリシャ語で、即興的で無秩序で自由に楽しさや面白さを追求し没入する相を、後者は、困難や難しさを克服していくようなルールを敢えてつくっていく相を示している。学生が回答した遊びの項目（A-1）からは、砂場あそびや泥団子作り、ブランコといったパイディア的なものと鬼ごっこや縄跳びなどのルドゥス的な遊びが混在しているが、その割合を幼少期と児童期とで比較すると、カイヨワが指摘するように、パイディアからルドゥスへと遊びの質が移行している。また、通園や通学時に屋外にて集団で遊んだ体験を想起し回答する率が高いことが分かる。一方で、折り紙などの伝承遊びや児童文学に関する知識に対しては「できる／知っている」と自己評価が高い傾向がみられたが、授業の中で実践したり確認したりする過程で、それが反転することがあった。実際に遊んだ経験は少なく、理解が足りず、知識の蓄積が不十分なこと

を、演習形式の学びを通して学生は自覚することになる。だが、こうした自己省察は「児童文化」を学ぶ目的を再認識し、学生の学修意欲の向上にとって不可欠であると考ええる。

続く〔調査B〕の結果からは、保育者養成校の学生は最初の実習活動から絵本や紙芝居といった児童文化財活用が現場での課題となることが分かる。絵本の読み聞かせ自体は、幼少期に読んでもらった体験によりその効用や作法について一定の理解を有するが、その教材への知見は教員の想定以上に狭く浅かった。

学生の読書習慣の形成にかかわる〔調査C〕において、保育者養成校に在籍する学生の半数が読書をしない状況、不読率の高さが明らかとなった。課題で2,000字程度の文章を配付すると、あからさまに忌避の態度を示す学生もみかける。こうした読書行為への興味や関心の薄さや習慣化できなかった背景には、当然ながら2000年代以降の情報メディア環境の変化がある。敢えて文字を目で追い、文章を読まなくても音声付動画で事足りる時代になったと言えればそれまでだが、日本の教育現場における「読解力の低下」は国際比較を通してここ何年も俎上にあがる課題である。その解決策として、学校現場では始業前の数分間に自分の読みたい本を読む（教員も一緒に読書をする）活動、通称“朝の10分間読書”が行われている。だが、その実際は〔調査C〕の結果にある通りである。上級になるほど本を読まなくなっている状況こそ、現行の学生たちの“読書活動”に対する意識であり意欲の程度なのである。

7. 「児童文化」授業の授業内容と教授法について

遊びや玩具を主題とする本科目は、履修する学生にとって“面白そうで且つ楽そう”な授業であるらしい。一方で、内容は目新しさに欠け、学問的な意義や目的を認知しづらいものでもある。学生の子ども時代に楽しんだ経験を生かしつつ、子どもを楽しませる保育者の視座と意識を持たせることが「児童文化」科目の教育目標となる。教員として伝承玩具や絵本、共遊玩具等は“実物”を使用し、可能な限り実際に学生が手に取り遊び、学生間で自由闊達に意見交換のできる授業を展開したいと考える。また、遊んで終わり作って終わりにならないよう、学術的な情報を伝え指導法への接続を行う必要がある。昨年度は、一回一回の授業の振り返りを学生たち自身に自由に記述してもらっていたが、令和4年度は教員の設問に回答する形式に変更する予定である。その方が、学生自身の省察に繋がるのではないだろうか。

読書活動への関心や意欲を少しでも高めるために、まずは教材である「絵本」を実際に手に取って音読する課題（「絵本リスト」）を、授業時間外の課題として準備している。読後はリストの記載欄に単なるあらすじを書くのではなく——あらすじはインターネットですぐに検索できるので——当該絵本の特徴（形態、文章表現、絵（色彩や筆のタッチ）、キャラクターの造形、しか

け等)を具体的に記入してもらい、定期的に教員が進捗状況を確認するようにしたいと思う。本学には小学校教諭免許の取得を目指す学生も「児童文化」を履修するので、昔話や西欧の童話などを説明する回では、実際に作品を学生が読む機会につなげたい。加えて、ゼミ(保育・教育学演習)や担当する他科目の教育活動の中で保育活動の事例文を読み解いて考察する課題を用いたり、筆記試験の設問を工夫するなど、学生の読む機会を多く提供し、自身の教授法も常に研磨していきたい。

今後の課題は、令和4年度の授業実施後に今回の授業刷新の企図が思うように進んだのかを省察し、引き続き新履修学生の遊び体験と児童文化財への関わりの調査を継続することである。

付記

本論文は、日本保育学会第75回研究大会(2022年5月15日、於:聖徳大学)において研究発表した『『児童文化』と『音楽』の授業内容と教授法の探究——保育者養成校の学生を対象とした遊びの経験や児童文化財に関する調査から——』(共同発表者:宮澤多英子講師)の内容に、学生の読書活動に関する調査結果を加えて論文化したものである。

参考文献

ロジェ・カイヨワ(1958)『遊びと人間』講談社学術文庫

(提出日:2022年9月22日)